

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

高校生の部 優秀賞 受賞作品

『「我は我なり」から、今』

東京都
学習院女子高等科
一年 大上 夏希

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「我は我なり」から、今

学習院女子高等科 一年
大上 夏希（おおがみ・なつき）

あなたはあなた。私は私。考え方も、趣味も、置かれている環境も違う。これから歩む道も全く別のものになるかもしれない。けれど会ったり、話したりすると楽しく、不思議と心地良い。誰にでも、一人はこのような友人がいるのではないだろうか。

「君は君 我は我なり されど仲良き」

これは大正から昭和にかけて活躍した作家、武者小路実篤の言葉だ。人生の大切さや美しさ、人間愛を語り続けた実篤は多くの温かい言葉を残している。彼自身、第二次世界大戦など逆らえない時代の流れの中に生き、その中で自らも山あり谷ありといった人生経験を経て、それぞれの個性を認め合うことの大切さを見出したようだった。実篤は特に、自分も人も同じように認められるおおらかな精神を持つことを心がけていたという。この言葉は、そんな実篤が好んでよく色紙に書いたものである。お互いの違いを認めた上で仲良く生きようというのは、実篤が生涯を通して大事にしてきた、いわば人生のテーマ、信条のようなものだったのだろう。

そして、私にとって大事なことを気付かせてくれた言葉でもある。相手に自分と同じもの、同じことを求めているは何も始まらない。だから、互いの違いを知り、それを相手の個性として認めることが大切なのだ。そうして初めて、「友」といえる関係ができる。しかし、「互いに違いを認め合う」ことは言葉で言うのはたやすいが、実際に実行することは容易ではない。

私は自分だけで凝り固まってしまうところがある。例えば、年度始めの自己紹介で好きなことや趣味を各々紹介する時のこと。自分と全く別のものが好みだったり、自分があまり詳しくないものが好きだったりする人とは、その時点で友人になる可能性はゼロに等しい。自分と全く別の趣味を持ち、異なるタイプの人を拒否しているつもりはないが、あの人とは友達にはなれないな、と最初からあきらめている自分がある。一方、そのような違いのある人と友達になれないと思ってもそれほど残念にも思わない。なぜなら、自分は自分だから。自分の好きなことは譲れないし、他の人の意見を否定はしないが、自分の意見を変えることはない。つまり、私は「我は我なり」と思いすぎなのだ。

これまで私はずっと「我は我なり」の状態だったのだと思う。それでも困ることはなかったし、自分が自分であることに自信があった。私は、知らず知らずのうちに傲慢になっただのかもしれない。そんな私を心配したのだろうか。ある時、母が一枚の古い色紙を和筆筒の奥から出して手渡してくれた。そこには、ごつごつとしたジャガイモと芽の伸びた玉葱が優しい色で描かれており、「君は君 我は我なり されど仲良き」の文言が墨字でおおらかに書かれている。この言葉を目にした時、そしてこれが武者小路実篤が生涯かけて導き出した言葉だと知った時、私はこの言葉の持つ本当の意味を考え始めた。表面だけをとれば、学校などでも度々目にする「お互いの個性を認め合って、仲良くしましょう」というスローガンそのものだ。だがそうではない。単に人の個性を認めるだけでなく、違いをもった人とも関わるきっかけを自ら作り、互いに理解を深め、価値観を認め合い、それを大切に思う心を持つことこそが、互いの仲をより良いものにしていくのだということではないだろうか。そ

の解釈が正しいのかどうか、実篤の意図に沿ったものかどうかは別として、「我は我なり」も良いが、「君は君」も認めた上で、「されど仲良き」の関係を築くこと、それが私の人生に大きな恵みをもたらしてくれるのだと信じたい。

今こそ、「我は我なり」の殻を破って大きく一歩踏み出そう。